

一〇一三年五月一二日

畦の蓼種落とさじと引きにけり
破れなき蜘蛛の囲朝の日を弾く
ゆらゆらと若葉の影や遊歩道
薰風に句談義尽きぬカフェテラス

一〇一三年五月一二日

車停め代田の畦を郵便夫
背くらべして直立す今年竹
顔みせるだけで孝行夏帽子
地響きに犬遠吠えす雷雨かな
花御堂水足しに来る寺男
剪毛の羊居眠り心地かな

一〇一三年五月一〇日

水車小屋取り囲みたる花あやめ
詰め物は信濃新聞アスパラガス
竹落葉絨毯めきし藪小径
弓のごと撓む葉先に天道虫

素千満天
せいじこすもす
秀子澄千鶴

一〇一三年五月八日

草原を波打たせゆく風涼し
御朱印の祢宜の手もとに緑さす
里山に衍す音や草刈機
尾を垂れて次の風まつ鯉幟

一〇一三年五月七日

漁火の見ゆる宿窓明け易し
法話聞く座に通ひくる若葉風
湧く雲のごと中腹の椎の花
口笛の通りすぎゆく南風の路地

一〇一三年五月六日

御朱印の墨薰風に乾きけり
独り立ちできて喝采武者飾
昇天のごとビル風が蝶攫ふ
夏霧を纏ふ神なる三輪の山
群雲の走り過ぎゆく月涼し
女将呼ぶ蓋の開かない焼菓螺

あひる
せいじ
千鶴
やよい
はく子
なつき
せいじ
せいじ
素秀

かい
かえる
ぼんこ
明日香
むべ
豊実

毎日句会みのる選・一〇一三年五月一四日

子どもらはお菓子が目当て花まつり
刈草を天地返しや風薰る
通ひ来る風に機嫌や釣忍
硝子器に青楓添へ京料理
息災の一筆添へて新玉ねぎ
五月雨ほとばしり散る鎖樋
青白き月光捉へ蜘蛛の糸